

小学校外国語活動における振り返りカードを用いた 評価方法に関する研究

河合 那奈*・岡崎 浩幸

Investigation on the Educational Evaluation Instrument for the Elementary School Foreign Language Activity

Nana KAWAI*, Hiroyuki OKAZAKI

Abstract

The main purpose of this study is to construct a conceptual model, which explains the "student self-evaluation card" employed in the "Foreign Language Activity" in elementary schools in Japan. The data collection instrument used in this study was an interview of four public elementary school homeroom teachers. Analysis was carried out by Structure-Construction Qualitative Research Method (SCQRM) developed by Saijo (2007, 2008). From the results of this study, four elementary school teachers have almost similar perceptions about the self-evaluation card, and three categories about the use of card are generated; roles of the self-evaluation card, effective use of the card, and effectiveness of the card. The self-evaluation card may be helpful in encouraging students to be autonomous and also in motivating teachers to accomplish their teaching objectives.

キーワード：小学校外国語活動, 振り返りカード, 評価方法

1. 問題の所在

外国語活動について、文化・言語についての体験的な理解、コミュニケーションへの態度、外国語への慣れ親しみという3つの目標が学習指導要領には示されている。しかし、具体的な評価規準や、どのような評価の方法があるのかが明確になっておらず、「評価についてどうするか」を十分協議するに至っていない現状があり、評価方法には工夫改善の余地が残されているということ、小学校英語教育学会の課題研究グループは指摘している（萬谷他、2012）。研究報告では子どもの自己評価を中心に取上げ、自己評価のメリット・デメリット、規準・基準の設定の仕方、子どもの学びへの影響などの視点から、子どもの学びを方向付け、意欲化するための評価方法、子どもの姿を把握し授業改善につなげるための評価方法の在り方について、具体的な事例を中心にまとめられている。5つの振り返りカードの例が挙げられており、それぞれどのような利点や改善点があるのかを明らかにしているが、デザイン面はもちろん、評価の観点や目標設定の仕方各学校の教師によって異なっており、評価の仕方は教師

の授業スタイルや信念によって大きく左右されるものであると考えられる。

そこで、外国語活動の具体的な評価方法の例が示されていない中で、現場の教師たちがどのような目的や信念を持って振り返りカードを使用しているのかについての研究は多いとは言えない。小学校教師のインタビューを通して見えてくる実態や問題点から、児童のためだけでなく教師の授業改善にもつながる振り返りカードの在り方を考察したい。

2. 本研究

2-1. 研究課題

本研究は、外国語活動における振り返りカードについて、以下3つを明らかにすることを目的とする。

1. 振り返りカード使用の実態や問題点を明らかにする。
2. 振り返りカードを用いて評価を行うことが、児童のためだけでなく、教師の授業への省察にもつながるかどうかを明らかにする。
3. 「振り返りカードを用いた評価」についての構造図を生成する。

*富山県滑川市西部小学校

2-2. インタビュー方法

小学校教員が実際に使用している振り返りカードの内容や、振り返りカードによる子どもの自己評価について、インタビューを行った。インタビューは、あらかじめ設定しておいた質問項目に加え、教師の回答に応じて不十分な部分を補う質問や、回答者の答えの意味を確認したり、インタビュー中に湧いた筆者の新たな興味や疑問によって質問を加えた。回答者の自由回答に対して柔軟な変更ができる「半構造化インタビュー」(鈴木, 2002)の手法を用いた。

2-3. 研究協力者

研究協力者は、Y 県の小学校教員 4 名で、A は国立大学附属小学校の教員、その他 3 名は県内の公立小学校の教員である。性別、教職年数、外国語活動の経験年数、振り返りカード使用年数は以下の表 1 に示す通りである。ただし外国語活動担当の経験年数について、移行期間も含め、本格的に実施されてからの年数と、学習指導要領改訂以前に総合的な学習の時間の一環として行っていた期間も含めた年数を () 内で示した。また、振り返りカード使用年数については、正式実施前の期間も含めた年数である。

表 1. 研究協力者データ

教師名	性別	教職年数	外国語活動の経験年数	振り返りカード使用年数
A	女性	17年	5年(12年)	12年
B	男性	16年	8年	8年
C	女性	28年	5年	5年
D	女性	8年	5年(7年)	7年

表 2. 分析ワークシートの例

概念名	他の児童の長所への気づき			
定義	振り返りカードに、友だちの良い所について記述する項目を作ることで、友だちへの意識を高めるような教師の工夫			
具体例	A	・友だちについて、こっちはちょっと言葉や文化について、分けて書いてみたんですね、友だちの良さにも気づける素敵な自分を目指そうということ进行全面に出したカードを今作ってみたところです。		
	B	・小教研とかで、こういった授業をしてこんなカードを作ってみたって、友だちの素敵な姿とか見させてもらって、これは良いなと、明記してあることで意識付けできるかなとも思ったので。		
	C	・これで1時間分にしようと思っていて、これは自分の事を書く、これは友だちの事を書く。こうすると子どもは意識するんですね、友だちのことも見ようって。		
	D	・工夫したのは、ここ(感想)をかくことと、友だちの良かったところは付けてよかったと思います。		
理論的メモ	どの教師も、外国語活動を通して子ども同士のつながりを大切にしたいと考えている。			

2-4. インタビュー内容

振り返りカード使用の実態を明らかにし、振り返りカードが子どもたちだけでなく、教師自身の授業改善にも役立つかを明らかにするため、以下の8つの質問を設定した。

1. どのような目的で、子どもたちの振り返りを行っているのですか。
 2. 振り返りカードをどのように活用していますか。
 3. 振り返りカードで工夫している点を教えて下さい。
 4. これから改善していきたい部分があれば教えてください。
 5. 振り返りカードの子どもたちの記述の中で、どのような回答、コメントが多いですか。
 6. 教師の見取りと、子どもたちの自己評価の間にずれを感じることはありますか。
 7. 子どもたちの記述の中で、教師自身の励みになる、あるいは授業改善に役立つ記述はありましたか。
 8. 子どもたちの振り返りは、自分の授業改善に役立っていますか。
- 1~4の質問は、主に「振り返りカードの使用実態」を明らかにするため、5~8は「子どもたちの自己評価」に関する実態や教師の考えを明らかにするための質問である。

2-5. 分析方法

小学校教員4名からのインタビューの回答を、構造構成的研究法(SCQRM)(西條, 2007)を用いて分析を行った。この中核概念を「関心相関性」といい、研究者の関心、研究目的に応じて、対象者や技法といったあらゆる研究を構成するツールに拡張

して選んでいけばよいとする「関心相関的選択」(西條, 2007)という考えに基づく。今回は、振り返りカードを教師がどのような目的で役立てているのか、という「関心」に基づきインタビューを行った。

分析方法と手順は以下の通りである(西條, 2007)。

1. インタビューの録音データを文字起こしし、テキストを作成する。
2. 質問に対する回答を、テーマが類似している文に区切り、具体例とする。
3. 同じ内容の具体例をまとめ、概念名を付けて定義付けをする。
4. 概念名とその定義、具体例、対極例や分析の視点を書き留める理論的メモを分析ワークシートにまとめる(表2)。
5. いくつかの概念を包括するカテゴリーを作る。
6. 概念とカテゴリーの関係を示しながら理論化を行い、モデルを作る。

3. 結果と考察

インタビューの結果から、「振り返りカードの〈役割〉」「振り返りカード〈作成上の工夫〉」「振り返りカードの〈効用〉」という3つのカテゴリーが抽出された。図1はそれぞれのカテゴリー名とその基になっている概念名を示し、カテゴリー間の影響関係を表している。まず、それぞれのカテゴリーについて、どのような概念が含まれるか、その定義と考察を踏まえて説明していく。

3-1. 振り返りカードの〈役割〉

このカテゴリーは、①目標達成状況の把握、②単元の目標、③通知表の所見、の3つの概念からなる。定義は、「振り返りカードがどのような役割を果たしているかについての教師の考え」である。

3-1-1. 目標達成状況の把握

この概念の定義は、「子どもたちが1時間の授業の中で、ねらいや目標をどの程度達成することができたのか、子どもたち一人ひとりの学習状況を教師が把握すること」である。

A教師は、「子どもたちがその時間のめあてを達成しているかどうかを調べるため、子どもたちがねらいを達成しているかを見る材料になっている」というように、子どもたちがその時間の目標を達成し

ていたかどうかを確認するためにカードを利用していることが分かる。

一方、B教師は、「子どもが楽しんだのかどうなのか、難しいと感じたのかどうなのか、今日の教材や活動が、子どもたちにとってどの程度のハードル(難易度)だったのかなということは見ればさっと把握できる」というように、子どもたちにとっての授業の難易度を知るために、振り返りカードを用いている。

以上のことから、子どもたちの書いた振り返りカードの内容をもとに、目標の達成状況や子どもにとっての授業の難易度を、教師は把握しようとしている。子どもの理解やめあての達成が十分ではないと判断した場合には、既習事項をしっかりと練習できる時間を設けたり、活動のレベルや内容を調整したりして、次の時間の授業作りに生かそうとしていることが考えられる。D教師の「お互いの次へのステップ、次へつなげるための振り返りにしています」という回答からも分かるように、振り返りカードを使い、子どもたちの学習状況を把握することが子どもたち

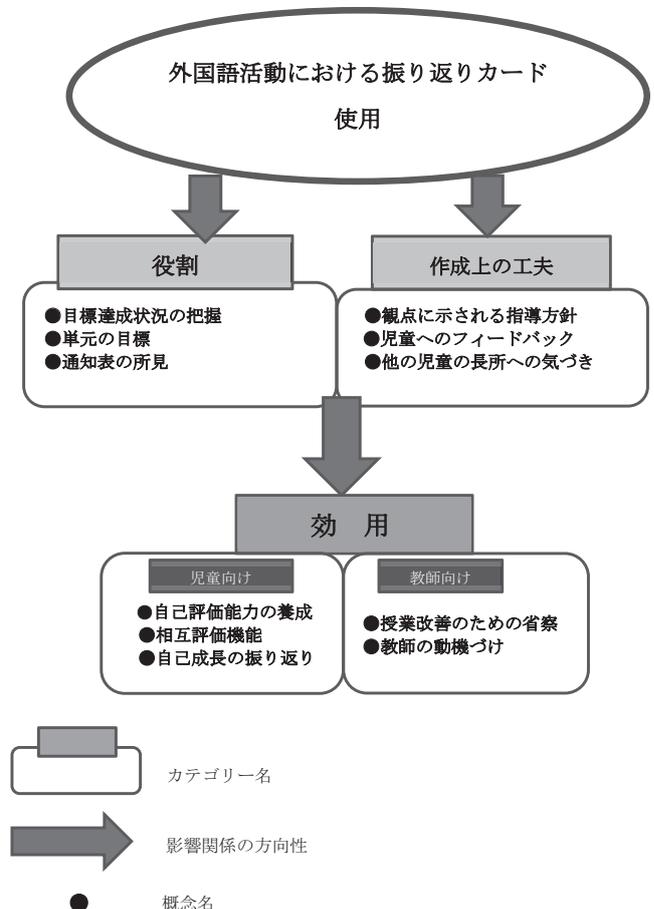


図1. 外国語活動における振り返りカード使用モデル

のためでもあり教師の授業改善にも結び付くことになる。

3-1-2. 単元の目標

この概念の定義は、「各単元のめあてを明らかにし、教師と児童の両方が授業の流れに見通しを持つるようにすること」である。

A 教師は、「時間ごとのめあてをちゃんと持たせたかった。バックワードデザインって言うんですけど、ゴールに向けて、(中略)前の時間はどんなめあてを持てばいいのか、じゃあこの4時間目のこの友だちに目的(地)を案内するためには、3時間目に何ができなければならないのか、それをねらったカードにしたんです」というように、単元の最終的なゴールを明らかにすることで、1時間ごとの目標を決め、授業ごとに黒板に提示し、振り返りを行っている。それが結果として、学習の見通しにつながっているのだと考えられる。C 教師は、「1時間目は聞く活動が多いんですけど、だんだんと少し言葉を発するようになる2時間目、そしてそれがセンテンスに近づいていく3時間目、ここに最終タスクがあるんだけど、だいたい自分でこうなっていくというのが分かるっていうこと。こどもの中に、その1時間どういふことをするんだろうっていう流れが見えるというのは、他の教科でも授業の流れを提示してやって、目安を持って1時間に取り組むということ」というように、その時間の活動内容に合っためあてと最終のめあてを、振り返りカードに書かせることによって、子どもたち自身がめあてに向かって活動に取り組むことができる工夫を行っている。また、D 教師も「この単元ではこれを勉強するから、このゲームはこれをマスターするためだな、とかいうふうに子どもたちは考えてやるようになっています」と語っているように、その単元で子どもたちが学習する内容を伝えることで、ゲームなどのアクティビティをする意義を考えながら取り組むことができるようにしている。

一方、B 教師は「理想としては単元によって振り返らせたい観点が違ったりしてくるので、できれば1枚に一つの単元で、1時間目だったらこういうめあてで活動する、2時間目はこういうめあて…そういったものを単元全体の活動が分かるような振り返りシートを作り、観点も(中略)時間によって分けて、そういったシートがあれば、子どもはそれを見

ることで活動の流れの見通しが持てるし、そういったのができればいいのかな、実践はしていないけどぜひやっていきたいこと」と語っている。実際にB 教師の使っている振り返りカードを見てみると、時間ごとの「学習テーマ」、つまりめあてを書く欄が設けられており、1時間の学習の見通しは立てられるようになっている。しかし、1単元を通して1枚のカードにすることで、その単元が終わったときの子どもたちの姿がイメージしやすくなると考えており、これからの課題であると語っている。

以上のことから、振り返りカードを使って、その時間のめあてや単元全体のめあてを明確にし、子どもたちが授業の流れの見通しを持って取り組めるようにすることが、子どもの意欲を引き出し、教師のねらいに近づけるために大切であるという考えが、4人の教師に共通していることが分かる。

3-1-3. 通知表の所見

この概念の定義は、「子どもたちが書いた振り返りシートの内容を、通知表の所見を書く材料に活用すること」である。

「成績には使っています。その時その時に評価できないことがほとんどなので、それはすごく役に立ちますね(A)」、「何よりも必要感があったのは、自分たちは通信簿に所見を書かなければいけないので、そのための資料(B)」というように、通知表の所見に書く材料として振り返りカードが必要である、ということがA 教師とB 教師の回答から分かった。

外国語活動の評価については、2011年の中央教育審議会の答申にもあったように、「教科のような数値による評価にはなじまないものと考えられ」ており、子どもたちの行動や学習状況を教師は評価し、記述しなければならない。しかし、毎時間子どもたち一人ひとりの行動を記録していくことは難しい。このことから、子どもたちの自己評価が、教師が通知表の所見を書く際に有効な材料となり、「振り返りカード」という形で子どもたちの活動の記録を残しておくことが必要であることが分かる。しかしながら、評価方法を振り返りカードによる子どもたちの自己評価に限定するのではなく、活動の中で子どもたちの様子を観察したり、ワークシートを使ったりするなど、「多様な方法を用いて継続的・総合的に評価をすること」が望ましい(樋口他, 2010)。

3-2. 振り返りカード〈作成上の工夫〉

このカテゴリーは、①観点に示される指導方針、②児童へのフィードバック、③他の児童の長所への気づき、という3つの概念からなる。定義は、「実際に使用している振り返りカードについて、よりよい振り返りができるようにする教師の配慮と工夫」である。

3-2-1. 観点に示される指導方針

この概念の定義は、「教師の設定している観点に外国語活動を通してどのような児童を育てたいのかに関する教師の教育方針が表れている」ことである。

全体的な観点について、A教師からは、「進んで、関心・意欲、慣れ親しみですよ、そして気づき、この3つから振り返りをしています(A)」という回答が得られた。それぞれの詳しい内容は次のとおりである。「進んで…BEST (Big(clear) voice/gesture, Eye contact, Smile, Try) みたいな自分から進んで英語を話そうとしていたかという意欲的な面(A)」は、「意欲・態度」に含まれる。「自分が実際に英語で話したり、友だちに尋ねたりできたか(A)」は、「表現」に関する内容であろう。「日本語や英語、文化の違い、日本と外国の文化の違いや共通点、あと友だちの良さみたいなのところにも気づけたか(A)」の言語面・文化面・友だちの良さに関することは「気づき」という観点に含まれる。

同じようにB教師も、「意欲・態度」に関して、「楽しく活動できたか、外国語へのもっと知りたいというさらなる意欲が持てるかどうか(B)」と語っている。「自分なりに伝えることができたか(B)」というように、外国語を使って友だちと話すことは「表現」の観点に分類できる。これらの3つの観点に加えて、B教師は「内容がそれなりにわかったか(B)」と語っており、授業の「内容」についての観点も、めあて欄を見ると含まれている(図2)。以上のA教師とB教師のインタビューから、「意欲・態度」「表現」「気づき」「内容」という4つの観点を中心に振り返りカードを作成していることが分かった。

さらに、C教師は、「5つのポイント(Face to face:相手の顔を見る, Listening:相手の目, 表情, 動作を見ながら聞く, Clear voice:相手に伝わるような声の大きさで話す, Reaction:うなずいたり, 相手の言葉を繰り返したりする, Activeness:大き

な動作を付けて伝える)でやっているんです(C)」という子どもたちの行動面における観点も具体的に設定し、子どもたちに提示している(図3)。

評価の観点については、平成22年5月の初等中等教育局長通知「小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等における児童生徒の学習評価及び学習指導要録の改善等について」(以降、「通知」と呼ぶ。)において例示された外国語活動の評価の観点を参考に、学習指導要領に示された外国語活動の目標を踏まえることが大切である、ということが評価方法等の参考資料(国立教育政策研究所, 2011年)に書かれているが、A教師とB教師の考えている評価の観点が、通知の示す観点とほぼ一致していることが分かる。通知には、3つの評価の観点とその趣旨が明記されている(表3)。

また、1つの単元や1時間の活動ごとに、振り返りの観点を設定している教師もいた。B教師は、「例えば単元の初めの方だと、まずよく聞くこととか、2つ項目ぐらい自分の方で提示することが多い

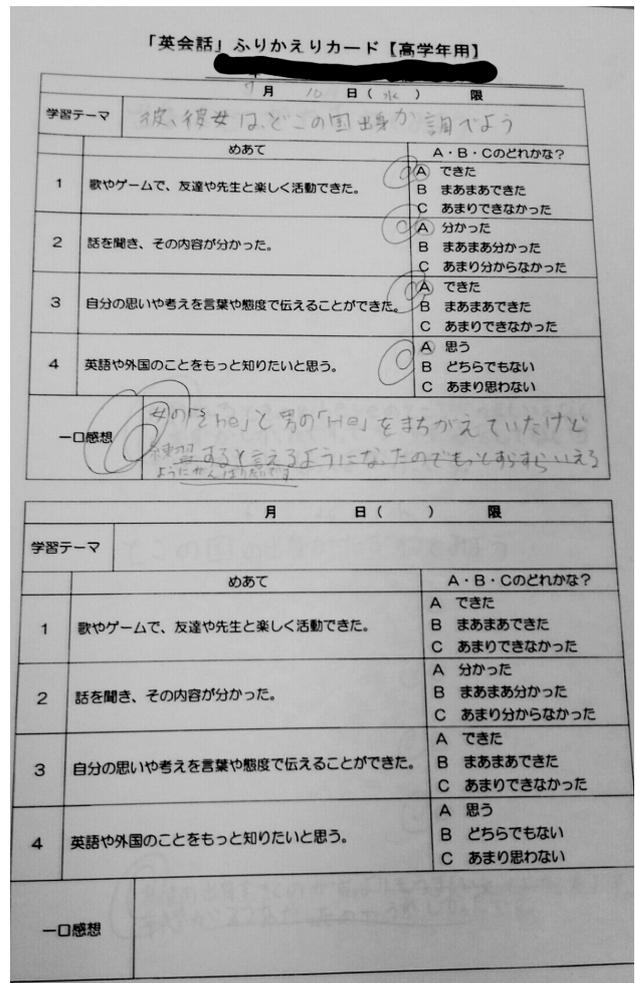


図2. 振り返りカード例

表 3. 評価の観点及びその趣旨

観点	コミュニケーションへの 関心・意欲・態度	外国語への慣れ親しみ	言語や文化に関する気付き
趣旨	コミュニケーションに関心をもち、積極的にコミュニケーションを図ろうとする。	活動で用いている外国語を聞いたり話したりしながら、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しんでいる。	外国語を用いた体験的なコミュニケーション活動を通して、言葉の面白さや豊かさ、多様なものの考え方があることなどに気づいている。

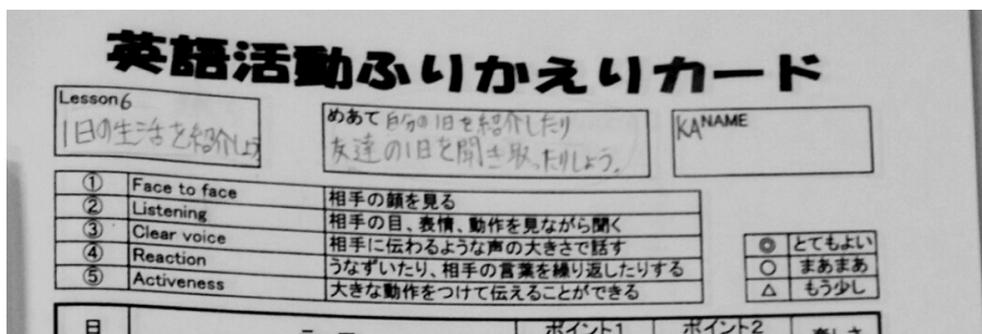


図 3. 行動面の観点が設定されている振り返りカード例

んですけど、コミュニケーション活動メインでやる
ときだったら、しっかり伝わる声とか eye to me
とか、単元によって振り返らせたい観点が違ったり
してくる。」というように、単元の内容に合わせた
めあてと観点を教師が選んで黒板で提示し、子ども
たちがどんなことに気をつけて活動をすれば良いの
かを明確にしている。

C 教師は、「最初に私が言うんですね、今日は聞
くことが多いよって、(中略) 今日なんかだったら 2
時間目の単元だったから割りとみんな、必ず顔を見
るとか、1 とか 2 あたりをするのが多くて、だんだ
ん、要はその順 (図 3 の振り返りカードにおける
①～⑤の観定の番号順) になっていくって感じ
になって」というように、その時間の注意させたい
行動面における観点を子どもたちに選ばせている。
C 教師のように、子どもたちにその時間の振り返り
の観点を選ばせるという活動を取り入れることは、
「自己決定能力、自己行動力を培うことにつながる」
(樋口他, 2010) と考えられる。また、それを「励
まし支援」することによって、「学習者の自律」に
つながるのである (樋口他, 2010)。

3-2-2. 児童へのフィードバック

この概念の定義は、「子どもたちの書いた振り返り
コメントに対する教師のフィードバック」である。
教師が子どもたちの書いた振り返りカードの内容を
チェックするポイントとして、A 教師は、「例えば

1 時間目では、新しい単語がいっぱい出てきたりす
るときに、そういう (新しく学習した) 言葉につい
て子どもたちが慣れ親しんでいたのかなとか、難し
いを書いてないかなとか、大きな声で進んで言おう
としていたのかな、みたいところをチェックしま
す。」というように、子どもたちの自己評価から、
新しく出てくる表現などへの慣れ親しみや、英語を
話そうとする態度、活動の難易度などを確認してい
ることが分かり、子どもたちの振り返りを踏まえた
教師の授業改善にもつながる。

また、D 教師はフィードバックを与える上で気
をつけていることを次のように語っている。「絶対に
否定はしない。いいことだけ、頑張ったことだけ、
アドバイスなんかを必ず書くようにしています。」
というように、振り返りカードの自由記述欄に書か
れた子どもたちのコメントに対して、必ず肯定的で
前向きなフィードバックをするように心がけている。
子どもたちの学習意欲を高めるためには、子ども
たちが 1 時間の活動の中でできたこと、頑張ったこ
とを取り上げ、励ましのある評価、やる気が起ころ
評価、次に繋がるプラス評価を心がけ、具体的にど
のような点で優れていたのかを子どもたち一人ひと
りに伝え、適切なタイミングで評価をすることが必
要である (樋口他, 2010)。続けて D 教師は、「(振
り返りカードを) 集めて、(外国語活動は) 週一
(回) なので、次の時にまた配りますよね。(子ども
たちに返却する) その時に、(外国語活動が) 始ま

る前に子どもたちは見るんです。結局、手紙みたい感じで（振り返りカードを活用している）」と回答しており、振り返りカードを子どもたちとのコミュニケーションツールの一つとしても使っている実態も分かった。

さらにC教師は、子どもたちが書いた振り返りカードをチェックする上で気をつけていることとして、「その場で返してあげるんです」と、授業の時間内に子どもたちが書いた振り返りカードをチェックし、返却している。これは、「他の科目の勉強もあるわけだから、これを20（枚）ためてしまうと、次に国語のものも算数のものも（チェックするの）って絶対無理なんですよ」という回答から、小学校教員は全教科の授業も担当しているため、外国語活動だけに時間をかけられるわけではない。子どもたちが振り返りカードを書き、その場ですぐにチェックすることで、教師にとっては時間の節約になる。また、子どもたちにとっても、「タイミングをずらさないことが必要（樋口他, 2010）」という指摘があるように、授業が終わってすぐに教師から自分の活動に対するフィードバックを貰えることによって、子どもたちの学習の意欲も高まり、次への学習の目標を持つことにつながっていくのではないかと考えられる。

3-2-3. 他の児童の長所への気づき

この概念の定義は、「振り返りカードに、友だちの良い所について記述する項目を作ることで、友だちへの意識を高めるような工夫をしていること」である。

A教師は、「友だちについて、こっち（新しく作った振り返りカード）はちょっと言葉や文化について（と友だちの良い所への気づきを）、分けて書いてみたんですね、友だちの良さにも気づける素敵な自分を目指そうということを出したカードを今作ってみたところですよ」というように、友だちの良さの気づきと言語や文化への気付きについての記述欄を分けることで、子どもたちが友だちのことや言語や文化について意識して活動をし、自分の活動を振り返られるような工夫をしている。子どもたちに意識させるということに関して、「これは自分のことを書く、これは友だちのことを書く。こうする（欄を別にすると）子どもは意識するんですね、友だちのことも見ようって」とC教師も語っている。D教

師もまた、「工夫したのは、ここ（感想）を書くことで、友だちの良かったところは付けてよかったと思います。」と語っており、活動全体の感想と、友だちへの気づきを書く欄を分けて作っていることが分かる。子どもたちに考えさせたい、意識させたいと思うことを、「感想」という一括りにした欄に書かせようと思っても難しいだろう。教師が、子どもたちに特に書かせたいと考える項目を取り出して、書く欄を分けて作るという工夫をするだけで、子どもたちの意識の方向付けができるのだと考えられる。また、友だちへの気づきを大切にしているということは、4人の教師に共通しており、B教師は現在のところ、友だちへの気づきを書く欄を設けてはいないが、「小教研（小学校教育研究会）とかで、こういった授業をしてこんなカードを作ってみたって、友だちの素敵な姿（についての記述）とか見させてもらって、これは良いなと、明記してあることで意識付けできるかなとも思ったので。」とB教師は語っている。

3-3. 振り返りカードの＜効用＞

このカテゴリーは児童向け①自己評価能力の育成、②相互評価機能、③自己の成長振り返り、教師向け④授業改善のための省察、⑤教師の動機付け、という5つの概念からなる。定義は、「振り返りカードを用いて自己評価を行うことによって得られる効果」である。

3-3-1. 自己評価能力の育成

この概念の定義は、「子どもたちに自分の学習したことを文章化させることによって、子どもたちが1時間の活動についての感想を整理したり、自分ができるようになったことやまだできないことを認識したりする自己評価能力を育てること」である。

B教師は、「実際なんとなく漠然と頭にあることがシートに書くことによって再認識したり、記録に残したり（B）」と語っており、また同じようにD教師も、「子どもたちってまだまだ自分の考えていることを整理できないので、書くことで整理できるんですね。書いたら、僕これ言えるようになったんだとか、これがまだ言えない、これがまだ分からない、って自分の中で子どもたちが出来たことと出来なかったことが分かっていく。」と語っている。振り返りカードに子どもたちが自分の活動や学習状況につい

て文字で表そうとすることによって、子どもたちが1時間の活動の中で頑張ったことや難しかったことなどを自分で認識したり、整理したりすることができる、つまり、自己評価力を身につけさせるのに役立つ面があると、B教師とD教師は語っている。

4人の教師が使用している振り返りカードには共通して、子どもたちが1時間の活動についての感想を書くことができる記述欄が設定されている(図4)。感想を書かせる理由の1つとして、子どもたちが1時間の活動の中で何を考えていたのか、子どもたち自身が自己の取り組みや態度を見つめ、自分の言葉で表す時間を作ることで、子どもたちが自分で自分の学習を振り返る「自己評価能力」を高めるための手立てになる。このように、自分自身の行動を客観的に見つめることができるメタ認知能力を高めることによって、「学習者一人ひとりが自分の学習に責任を持つことができるようになる(長沼, 2011)」、つまり、自律的学習者の育成につながる、という教師の考えがあるからではないだろうか。

外国人活動振り返りカード Lesson Let's go to Italy 友達は旅行に誘おう

BEST MY BEST

【このLessonでの目標】
自分の思いがはっきり伝わるように、行きたい国についてたずねたり答たりしよう。

1) 得意で
E Eye 大きな目とクマスマイルで嬉しそうに話そう。
E Eye 目をつないで嬉しそうに話そう。
S Smile 笑顔で話そうしよう。
T Try 進んで話そうしよう。

2) がんばり
自分の行きたい国を紹介したり、友達にたずねたりしよう。

3) がんばり
日本語と英語、日本語と英語の両方で友達に話そう。

今日の振り返り

日	今日の振り返り	チェックしよう	今日のマイベスト	今日の学び
7	① 旅行の目的地の国や旅行プランについて話そう。	○ ○ ○	① 得意で	かたことのない世界に人があっても、おもしろい世界があるから、おもしろい世界に人をあつめてあげよう。
8	② 行きたい国をたずねたり答えたりする言い方を話そう。	○ ○ ○	② 得意で	チャンスに新しい言葉を覚えておきたいから、おもしろい世界に人をあつめてあげよう。
9	③ 行きたい国をたずねたり答えたりする言い方に慣れよう。	○ ○ ○	③ 得意で	おもしろい世界に人をあつめてあげよう。
10	④ 自分の思いがはっきり伝わるように、行きたい国や行きたい理由を伝えよう。	○ ○ ○	④ 得意で	おもしろい世界に人をあつめてあげよう。
11	⑤ 友達に誘う言い方を話そう。	○ ○ ○	⑤ 得意で	おもしろい世界に人をあつめてあげよう。

★言葉や文化について気付きました!
国の違いを話そう。みんなが話そう。

★友達について気付きました!
みんなが話そう。

図4. 振り返りカード例

3-3-2. 相互評価機能

この概念の定義は、「子どもたちが活動を通して気付いた友だちの良い所を振り返りカードに書いたり、紹介したりすることによる相互評価としての機能」である。

A教師は「友だちの良さに気づくことで、授業の終わりに、〇〇さんがこんなふうに英語を話して、動作をつけて、笑顔でとか、そういうのでもいいですし、発音が上手だったとか、そういうことに気づいて認め合えたら、外国語活動がねらっている

温かい人間関係みたいなものにつながったり、話そうとする意欲、そういうのが大事ですよ、下手でもなんでも伝えようとするそういう気持ちを子どもたちが持ってくれないかなと思って、こういう欄(気付きに関する記述欄)を別に設けたんです」と、振り返りカードの下方に「★言葉や文化について気づきました!」と「★友達について気付きました!」と2つに分けることで、子どもたちが友だちの良いところに気づけるような工夫をしている(図4)。またB教師は、「(授業の)テーマに関する振り返りと同時に、短くてもいいから友だちのよかった姿とかも入れていけば(人間関係が)温かいものになるのかなと。(人間関係という一番大事な部分を外国語を通して本当は入れていきたいという、)これから目指していくことかなと、理想像ですね。特に外国語活動は学級面の状態がすごく反映されると思うので、子どもたちのつながりや関係が良ければ、より外国語活動でのパフォーマンスも上がると思うので。」と語っている。B教師は、A教師のように友だちへの気付きに関する記述欄を振り返りカードに設けてはいるが、友だちの良かったところを評価しあい、良好な人間関係を気付くために振り返りカードを活用したいと考えているようだ。

C教師は、「普段〇〇さんって、他の勉強だったとか(では)その人のいいところを見つけられない人でも、外国語だけじゃないですけど、その科目がすごく好きで頑張るお子さんっておられるじゃないですか、そういうお子さんへの認める言葉とか。」と語っている。英語でコミュニケーションすることによって見えてくる友だちの長所があるのだろう。さらに、「言葉で感想を必ず書かせて、最初はしてなかったんですけど、お互いのいいところも見つけられるように。あの人こんなこと言われてる、自分も頑張ろうって相乗効果になっていく。こんなことを言ったらいいんだ、とかっていうことが分かってくるので。先生が褒めるのとまた違って、友だちがいいってというのは嬉しいらしくて、それをいつもさせてました。」とD教師は語っている。子どもたちは、友だちに褒められること、つまり受容されることでやる気や自信を持ったり、友だちが褒められている姿を見ることで、どんなところを評価すべきなのかを学んだり、自分も頑張ろうと思えるようだ。友だちとの相互評価について、金森(2010)は、「活動に関する相互評価によって生まれる友達同士のふれ

あいや共同学習は、学びの志向性を高めるためにも利用できる」と主張している。また、樋口他(2010)では、「児童と教師、児童同士のよい人間関係や、他人から認められたいという気持ちを大切に、相互評価、自己評価を用いて自己肯定感を高める評価を実践したい」とも書かれており、子どもたちの自尊心や自己肯定感を高めるために、自己評価だけではなく、相互評価の手段としても振り返りカードを活用することが大切であると考えられる。

4人の教師のインタビューから、外国語活動を通して今まで友だちの知らなかった部分に気づいたり、お互いによかったところを褒めあったりしながら、温かな人間関係を作りたいという学級経営的側面も、小学校の教師は外国語活動のねらいとして持っているということが考えられる。

3-3-3. 自己の成長振り返り

この概念の定義は、「子どもたちが記入した振り返りカードを見返して学習の成果を振り返り、その後の子どもたちの学習に活用すること」である。

この概念に関しては、振り返りカードをその後の学習にうまく活用できていないという教師のほうが多いということが分かった。A教師は、「綴っていく、こうやっているんな学習カードも一緒に綴っているけど、別にこれをあえて活用みたいなことはしてないですね。」というように、振り返りカードや活動で使ったワークシートなどをファイルに綴っておくことはしていても、後から見返すということはないと語っている。B教師もまた、「こまめにやるっていうのはなかなか時間がないけど、学期の終わりにはこれまでの学習を振り返ってみようかと、見させることは有効かなと思いますね。」と、振り返りカードを学期の終わりなどに見返して自分の学習を振り返る機会を作ることが有効だと考えているが、現在は実践できていないようである。またD教師のように、「正直、なかなか時間はないですけど、『これでこのレッスン終わりだよ、もう一回見てみられ』や、『何できるようになった?』という声はかけています。」と、教室全体で見直す時間は作っていないが、振り返りカードをもう一度見直し、自分の学習の成果を確認するように子どもたちへの声かけを行っている教師もいる。

一方、C教師は、「(学習の)積み重ねにもなる。振り返ることもできるし、あのおときこういうことを

勉強したよね、思い出してみようって。ないじゃないですか、ノートとか。例えば、特に6年生だったりすると、外国のことを勉強するのは何回も出てきたりしますよね。ALTさんとの時間だったり、こういうことをまた使うときに(子どもたちが)自分で取り出してやってみました。」というように、授業に関連する既習内容を思い出すための材料として、子どもたちに振り返りカードをうまく活用させている。また、C教師の担当するクラスの子どもたちは、教師の声掛けがなくても、子どもたちが自ら振り返りカードや活動で使ったワークシートを見返すという習慣がすでにできており、「自律的学習者」の基礎ができてきているのではないかと考える。

3-3-4. 授業改善のための省察

この概念の定義は、「振り返りカードに書かれた子どもたちの自己評価をもとに、教師自身が1時間の授業を振り返り、そこでの反省を次への授業改善に活用すること」である。

A教師からは、「次の活動にどう生かしていくのかとか、どんな活動を仕組むのかを考える」というように、子どもたちの振り返りコメントを基にして次への活動を考えていることが分かった。同じようにB教師も、「次への軌道修正を知る、軌道修正をする」というように、子どもたちのコメントを踏まえて、次の時間でどのように授業を修正していけば良いのかを知る手段としている。D教師からは、「例えば、子どもが分からなかったとか、こんなことしてみたいっていうふうに気持ちを書いていると、次こんなことを次のステップとしてやってあげたら子どもたちは伸びていくんだなって思う。(子どもたちは)正直なので、ゲームが楽しかったとかって書くと、自分にとっては、この1時間というのは楽しかったかもしれないけれども、外国語活動としては△だったのかな(自分の授業のねらいをあまり達成できなかったのではないかと自分は思うんです。ゲームが楽しかった、勝ててよかったみたいなのは、自分がもう一つ手立てがあれば違ったのかなって、自分の反省にいつもなります。何を学んだのかなって。だから、次は勝負にしないでインタビューにしてみたりとか、形を変える。勝ち負けじゃないゲームにするとか、工夫してみます。」という回答が得られた。D教師の回答から、子どもたちの「楽しかった」という記述を、教師は必ずしも肯定的に

は捉えておらず、反対に、授業がねらいから外れてしまっていたのではないか、次回の活動をねらいが達成できるようにもっと工夫しなければいけない、という授業全体の流れや活動を省察し、次回への解決法を探り始めている様子がかがえる。

3-3-5. 教師の動機付け

この概念の定義は、「振り返りカードの中の子どもたちの記述によって、教師の動機付けに寄与すること」である。

「あんまり友だちと関われない子どもがいるんですよね、クラスには。そんな子が、自分のクラスだけじゃなくて他のクラスも出て、ちょっと関わってないなっていう子が女の子とかと会話して『おっ!』と思って、やってるぞと思って嬉しかった時に、その子が振り返りカードに友だちと英語で話すことができたっていうことを書いてたら、嬉しいなって思いますね。」というA教師の回答や、「内気な子が、2人にしか聞けなかったけど、今日は5人に聞けたとか、そういうことを書いてあると嬉しいですよね。」というD教師の回答から、普段友だちとあまり積極的に関わることができない子どもが、外国語活動を通して関わりを持てるようになったというコミュニケーションの面での成長についての子どもたちのコメントが教師のモチベーション高揚につながっている。同じようにB教師も、「楽しかったので次回も頑張りたいです、こういうカードをやって友だちとこういうことを言い合えて嬉しかったですとか、コミュニケーションを楽しんでもらえたとか、子どもによってつながりがあったとか、気づきが友だちのこういう面が知れて(というコメントが嬉しい)」というふうに、子どもたち同士のつながりに関する記述を見ると励みになると語っている。

一方C教師は、「海外のことを勉強した時に、将来外国に行って友だちを作りたいと思ったとか、日本って平和なんだなって、毎日学校来て勉強できるっていうのって当たり前だに思っていたけどそうじゃないな、というところまで、外国語を通じて、外国語だけじゃないところまで学んでくれているようなところを見た時とか。」と語っており、教師が学んでほしいと思っていたこと以上のことを、外国語活動を通じて子どもたちが考えたり、学んだりしていた記述に喜びを感じていることが分かる。また、D教師の「(英語を)好きになってほしいなっていうの

が自分の中にはあるので、できるようによりも好きになってほしい。だからそれが一番励みになります。」という回答から、教師は外国語活動で「英語を使うことができる」という技能的な部分よりも、英語を通して世界のことに目を向けたり、友だちの良い所を認め合ったりする、子どもたちの内面的な部分を育てていくことを大切にしており、外国語活動を通して、英語を好きになってほしいという願いを持っていることが分かる。以上のことから、子どもたちの記述が教師の動機付けに影響していると考えられる。

4. 結論

本研究では、小学校外国語活動の評価方法について、振り返りカードの在り方を探るため、4人の小学校教師へのインタビューと実際に児童が振り返りカードに書いた内容を、研究データとして分析を行った。この章では、2-1で示した3つの研究課題に沿って結論を述べる。

4人の教師へのインタビューから、振り返りカードを使用について、共通した理念として3つのカテゴリーを生成することができた。子どもたちの目標到達状況を把握するため、単元の目標を教師と子どもの両方が理解するため、通知表の所見を書く際の参考にするため、という3つの役割に沿って、振り返りカードを使用している実態が分かった。また振り返りカード作成の際に、観点到指導方針を落とし込むこと、子どもたちの自己評価に対する教師のフィードバック、他の児童の長所を意識させること、という工夫がなされており、よりよい振り返りができるようなカードの作成に向け、改善を重ねている教師の取り組みが明らかになった。

しかし、子どもたちの自己評価能力育成については、今後も指導していく必要があると教師が感じていることも分かった。4人の教師の振り返りカードには、1時間の感想を書くための記述欄が共通して設けられていたのだが、子どもたちの記述の質や表現力には個人差があることが分かった。「楽しかった」という感想を書く子どもたちも多く、何をどのように学んだのか、自分の活動を客観的に見つめる「自己評価能力」を高めていくために、振り返りの仕方や、カードの書き方に関する指導も、活動の中で継続的に行っていく必要を感じているようである。子どもたちにとって、振り返りカードを用いて自己

評価を行うことは、自己評価能力の育成につながるだけでなく、友だちの良い所に気づいたり、発表したりする活動は相互評価としての機能を持つ。更に、記入した振り返りカードを見返して学習の成果を振り返る活動も、自己評価能力を高めるために有効である。振り返りカードを用いることにより、以上のような効果があり、自律的学習者への成長を促進するための1つのツールとなると考えられる。

それだけではなく、教師にとっても、振り返りカードに書かれた子どもたちの記述をもとに、自分の授業を省察し、目標が達成できるような活動を工夫することで、授業改善につながる事が明らかとなった。さらに、子どもたちの「友だちと関わることが出来た」「英語が好きになった」という前向きなコメントが、教師の今後の外国語活動への取り組みへの意欲やモチベーション向上につながることも明らかとなった。

4人の教師へのインタビューを通して、どのような役割を期待して振り返りカードを使用しているのかを示す「振り返りカードの<役割>」、振り返りカードを作成する際の工夫を示す「振り返りカード<作成上の工夫>」、振り返りカードはどのような効果をもたらすのかを示す「振り返りカードの<効用>」、という3つのカテゴリーに分類し、振り返りカード使用の構造を表すモデルを生成することができた。今後は、子どもたちが自分の活動を正しく振り返ることができる「自己評価能力」を育成するために、どのような指導や手立てが効果的なのかについてさらなる研究が必要である。

引用文献

青木直子 (2008) 「学習者オートノミーを育てる教師の役割」『英語教育』第56巻, 第2号, 10-11項.
ベネッセ教育総合研究所. (2010). 『第2回小学校英語に関する基本調査(教員調査)』2013年12月6日検索
http://berd.benesse.jp/berd/center/open/report/syo_eigo/2010/index.html
中央教育審議会答申 (2008) 「幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善について」2013年12月20日検索
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/gaikokugo/kanren/toushin.htm
樋口忠彦, 大城賢, 國方太司, 高橋一幸編 (2010)

『小学校英語教育の展開—よりよい英語活動への提言』東京: 研究社, 200-217項..
金森強 (2010) 「小学校『外国語活動』の評価の在り方を考える」『ARCLE REVIEW』第4号, 103-117項
金森強 (2011) 「小学校外国語活動 成功させる55の秘訣—うまくいかないのには理由がある—」東京: 成美堂.
国立教育政策研究所教育課程研究センター (2010) 「小学校外国語活動における評価方法等の工夫のための参考資料」2013年4月19日検索
http://www.nier.go.jp/kaihatu/hyouka/shou/11_sho_gaikatu.pdf
文部科学省 (2008) 「小学校学習指導要領解説 総則編」東京: 東洋館出版社.
文部科学省 (2008) 「小学校学習指導要領解説 外国語活動編」東京: 東洋館出版社.
長沼君主 (2011) 「小学校英語活動における自律性と動機づけを高める Can-do 評価の実践」『ARCLE REVIEW』第5号, 65-74項
長沼君主 (2011) 「誰のための評価か, なんのための評価か—学習者中心の評価を考える」『英語教育』第60巻, 第2号, 35-37項
長沼君主 (2012) 「教科書ベースの CAN-DO リスト開発による小・中・高連携に関する考察」『自律した学習者を育てる英語教育の探求—小中高大を接続することばの教育として—』, 70-77項.
西條剛央 (2007) 『ライブ講義・質的研究とは何か SCQRM ベーシック編-研究の着想からデータ収集, 分析, モデル構築まで』東京: 新曜社.
西條剛央 (2008) 『ライブ講義・質的研究とはなにか SCQRM アドバンス編-研究発表から論文執筆, 評価, 新次元の研究法まで』東京: 新曜社.
初等中等教育局長通知. (2010). 『各教科等・各学年等の評価の観点等及びその趣旨(小学校及び特別支援学校小学部並びに中学校及び特別支援学校中等部)』2013年12月20日検索
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/nc/_icsFiles/afieldfile/2012/08/07/1292899_01_1.pdf
鈴木淳子 (2002) 『調査的面接の技法』京都: ナカニシヤ出版.
萬谷隆一, 泉恵美子, アレン玉井光江, 田縁眞弓, 大田亜紀, 森本敦子 (2012) 「外国語活動に関する

る研究—自己評価を中心に」小学校英語教育学会
紀要, 12, 147-154項.

萬谷隆一, 泉恵美子, アレン玉井光江, 田縁眞弓,
大田亜紀, 森本敦子 (2013) 「外国語活動の評価
方法に関する研究: 発達段階を意識した評価のあ
り方」小学校英語教育学会紀要, 13, 212-226項

謝辞

本研究は4名の先生方の全面的な協力を得て行
うことができました。4名の先生方には心より感謝
申し上げます。

(2014年5月20日受付)

(2014年7月9日受理)